



Title	『〈神社／仏閣〉願懸重宝記』について：ご利益情報集の姿
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 225-242
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91272
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『神社／仏閣願懸重宝記』について ―ご利益情報集の姿―

柴田芳成

一

『神社／仏閣願懸重宝記』(〳)は割書、以下同。本書を『重宝記』と略す)は、文化十三年(1816)の刊行で、病氣平癒など何かの立願に際して、それぞれに効験のある、大坂の神仏を紹介する案内記である。一部に住吉や堺など周辺地域も含むが、主たる対象は三郷およびその近辺を中心とした、近世大坂の都市域である。本作品は近世の民間信仰の様相をうかがう資料として、民俗学的な観点から取り上げられることが多かったが、ここでは靈験を紹介する説話資料という側面から考える試みとしてみたい。

まず本作品の全体像について、先行研究もふまえながら確認しておく。

著者の濱松歌国は狂言作者であるとともに、『撰陽奇観』をはじめとする近世大坂の地誌、習俗に関する著作も残している。安永五年(1776)の生まれと考えられ、木綿問屋の家に育ち、二十五歳頃には芝居作者となり、文政十年に五十二歳で没した⁽¹⁾。本書は四十一歳の時の著作となる。「叙」⁽²⁾からは靈験あらたかな神社仏閣、靈樹を選びまとめたという以上には、刊行の経緯はわからないが、本書に先立つこと二年、文化十一年に江戸の神仏靈験に関する『江戸／神仏願懸重宝記』(著者は万寿亭正二)が刊行されているので、その影響とも考えられる。なお、本書

は文政七年(1824)には書名を改め、『神仏靈驗記図会』(一名「願懸手引」(表紙、巻末))として刊行されている⁽³⁾。

前に述べたように、本書は近世の民衆信仰の資料として注目されてきた⁽⁴⁾。田野登氏は、本書に収載された六十九の記事について、「標題、所在地、願掛けの対象となる神仏諸霊の名称、祈願内容・願掛け作法、靈驗、願解き作法、縁日」の七項目を整理した表を示し、「このテキストからは、巡拝の盛行、個人祈願・現世利益の多種、願掛け対象および作法の多様、行事の多彩といった傾向を読みとることができる」とされ、祈願内容の分類からは、本書に「記載されている祈願は、個人祈願に限られていて共同祈願は取り上げられていない」、「ここにあげられている個人祈願は」「治病が七六パーセントであって近世の大坂に暮らす人々の神仏諸霊への願掛けに病気が大きな比重を占めると考えられる」と、本書から読み取られる信仰のあり様を指摘された⁽⁵⁾。

先行研究もふまえ、本書中に挙げられる神仏・寺社などの靈驗をあらためてまとめたものが左の表である。

ご利益のあり方こそが祈願の反映であることを考えると、すでに指摘されていることでもあるが、その数からみて、これらの神仏には致富や良縁よりも病氣平癒が求められたことがわかる。現代では疱瘡は過去の病氣となっただれど、医療・衛生状況の異なる当時においては相当に危険であったろうし、子どもの病氣、出産に関わる諸事、歯痛や痔疾などは、時代の別なく今日でも患う人は多い。そうした身近な病氣にかかってしまったときに頼りとなる神仏が紹介されているわけである。

話番号	神社／仏閣	願懸重宝記	内容一覽
19	榎	野田村戎社の内	所願成就
18	子の権現	同所西、光智院の元三大師堂	痔・淋病・消渴・下の病 平癒
17	秋山自雲靈神	上福島岡松寺の内	痔
16	王仁の祠	梅田の西の野中	諸願成就
15	薬師如来	梅田墓所の西	歯痛、諸病平癒
14	牛かけ(牛のやぶ入り)	北野梅田道(五月五日行事)	小兒痘瘡
13	妙見祠	北野新屋敷法清寺(かしく寺)	労咳、悪酒断ち
12	目神八幡宮	北野	眼病平癒
11	妙儀大権現	北野太融寺境内	歯痛平癒
10	粟島大明神(戎社)	天満堀川寺町橋角堀川	諸病平癒
9	北辰妙見菩薩	同所西成正寺	開運除厄
8	清正公大神祇	同所西妙福寺	諸願成就
7	厄除け観音	同所西栗東寺	厄難除け
6	子安地藏	天満東寺町龍海寺	安産
5	白根根大明神(稻荷社)	天満天神の社内	所願成就
4	毘沙門	信貴山、長町大栗坊、下寺町、生玉、天満寺町、北野村等、順巡所一五ヶ所(大坂寺社順巡記)	富貴、家業繁昌
3	金毘羅大権現	中之嶋富安町、讃州高松公藏屋敷、天満、高津、生玉、千日法善寺、堀江阿弥陀が池、博労町・稻荷社、平野町御霊社内の勧請所	海上難・火災難除け
2	大聖歡喜天	所(大坂寺社順巡記)	諸願成就
1	北辰妙見菩薩	能勢郡野間村妙見祠、久々知広濟寺、千日自安寺、高津、天満寺町等の勧請所	家業繁栄、厄難病苦除け
	神仏	場所	願掛け内容
			方法
			お札

『(神社／仏閣) 願懸重宝記』内容一覽

では、これらの神社の地理的な分布はどのようなになっているのか。紙幅の都合で地図をもつて示すことは略すが、提示される神仏、神社の順と位置は、おおよそ次のようになっている⁽⁶⁾。

特定の神社・神仏ではなく、総体としての神仏名を掲げる1〜4は措き、おおよそを示すと、5〜19は天満、北野辺から福島へと市街区域の北側を東から西へ紹介する。20〜40で中之島の諸藩蔵屋敷から北・南の中心地、嶋之内・道頓堀地域となり、42〜56で天王寺界限、57〜69で住吉や堺といった周辺地域と続く。

それぞれの神社の神仏の霊験やご利益を広く紹介する場合、読者・利用者の便を考えると、神仏別、効能別、地域別など、何らかの分類をもつて提示する方法が考えられる。右に確認できたように、ここでは、おおまかながら地域別の方針が採られていると見てよいだろう。文化十三年版「重宝記」から文政七年版「図会」への名称変更には、その背景として、本書を単なる情報集にとどめず、案内記でもあることを明示する意図もあつたのかもしれない。地誌、案内記で「図会」を採用する『都名所図会』(安永九年(1780))をはじめ、大坂地域が対象となる『撰津名所図会』(寛政八年(1796))もすでに刊行されており、「図会」の名称は地域ごとに紹介する内容とも合っていた。

二

次に、取り上げられている神仏の霊験・ご利益の語られ方について検討してみたいが、ここではその一例として、地蔵に注目してみる⁽⁷⁾。本書には七つの記事が記載されている。いずれも比較的短いので本文を示す。(番号は掲載の順を示す。ただし本文の漢字表記を算用数字に改めた)

6 天満東寺町龍海寺の子安の地蔵は霊験あらたなれば、懐胎の婦人参詣すべし。御縁日(二十四日)。

25 貝屋まち筋大目ばし筋一丁西乾角道空町といふ霊験地蔵尊は、本山黒谷四十二世神誉上人、安永七戌年の夏

- の頃、大坂御巡行の時、開眼なし給ひてより日々に靈験著く、それゆへ靈験地藏尊と称じ奉る。諸病平癒を祈るに必ず験あり。御礼には絵馬を奉納す。信心の詣人、百度参をせんと思はば、標石北の門際にあり。
- 27 北堀江四丁目五丁目のあいだ、和光寺あみだが池といふ門内に、抹香の地藏尊とてあり。諸人立願して病気の平癒をいのり、本復の後、御礼には抹香を供せんと誓へばかならず靈験あり。
- 28 幸橋南詰一丁西少し南へ入所に、北向の地藏堂あり。此地蔵尊へ無言にて参詣なし、齒のいたみ平癒の立願すれば、忽ち治す。そののち、一年又は二年三年なりとも信心次第、塗箸にて食事せざるよう誓言すべし。
- 31 安堂寺町一丁目筋東北角、油かけの地藏尊は、小児の諸病平癒の立願すべし。参詣のせつ、油かけ能化の地藏大ぼさつげに安曇寺の古跡残れる
- 38 此御詠歌を三遍唱へて後、立願成就なさば、油をかけ奉るべしと誓ひ、御礼参りには地藏堂の外にまします石仏の地藏尊へ油を灌ぐべし。此地は往古、安曇寺といへる大寺の跡にて地藏尊は千五百年に及ぶ。
- 56 上町御茶湯の地藏尊は、小児の髪を惜み、又は月代を嫌ひて泣叫ぶに、この地藏尊へ参詣して靈前に供ずるお茶湯を小児にいただかせ、其あまり茶にて月代をよくもみて帰るべし。髪を惜み月代をきらふ事、速にとどまるなり。
- 56 新清水北手の坂の半途西がはに東向に立たたまふ地藏尊の石仏に花を供じて立願すれば、五痔を患る人、忽平癒なす(此坂の辺には花屋一軒もなきゆへ、寺町にて求め行て石仏の前なる花瓶にさすべし)。
- 右にみるように、地藏だけに限つても、子ども、女性、歯痛、痔疾、諸病と、さきの表に示したご利益の、ほとんどの内容が出そろっていることがわかる。近世に地藏信仰は盛んであった。ただし、そこに求められたのは、古代・中世にみられた死後世界での救済者としてではなく、この世での現実的な救いである。葬式仏教の系列とは別に、近世全般に仏教界で現世利益的傾向が強くなるが、地藏もまたそうであった。

それでは、ここに取り上げられた地蔵への信仰の広がり、あるいは古さはどれほどであろうか。近世には、その時々、時期に爆発的な信仰を集める流行仏も出現する⁽⁸⁾が、ここに紹介された地蔵はどうだろう。

そもそも、ここに紹介された地蔵はどれほど有名なのだろうか。大坂の著名な地蔵とはどの地蔵を指すのか、諸書に紹介される例を見てみよう。

『延命地藏菩薩経直談鈔』元禄十年 (1697) 「摂州大坂六地藏菩薩」(卷十二付録七)

一番 国分寺地藏尊〈長柄〉 二番 大長寺地藏尊〈網島〉

三番 正覚院地藏尊〈八丁目寺町〉 四番 専修院地藏尊〈谷町筋〉

五番 天曉院地藏尊〈相坂〉 六番 法善寺地藏尊〈道頓堀〉

『大坂』寺社順拝記』明和九年 (1772) 「六地藏巡」(のち、安永版『難波丸綱目』第二冊にも収載)

第一 〈てんまながら村〉 国分寺 第二 〈あみしま〉 大長寺

第三 〈八丁め〉 天然寺 第四 〈谷町筋西ほやけぢぞう〉 専修院

第五 〈てんわうじいんどうぢぞう〉 天曉寺 第六 〈どうとんぼり〉 法善寺

『難波丸綱目』安永六年 (1777) 「名地藏」(第二冊)

ほやけ 「頬焼」 生玉寺町 ちみん 北野村

たぬき 玉つくり東 おちやとう 「お茶湯」 農人ばし筋谷町東

油かけ あんどうじ町筋 いんだう 「引導」 天わうじ一心寺前

「六地藏」が挙げられる例を掲げたが、『延命地藏菩薩経直談鈔』と『大坂』寺社順拝記』では八十年ほどの開きがあるが、同じ六地藏が挙げられ、その中に本書の七つの地蔵はいずれも含まれていない。それに対し、『難波丸綱

目』の選択は大きく異なり、茶湯地藏(38)、油懸地藏(31)が入っている。その一方、本書に採られてはいないものの、両方の六地藏に名が挙がる類焼地藏のような存在もある(順に、四番専修院地藏尊・第四〈谷町筋西ほやけぢぞう〉専修院・ほやけ 生玉寺町)。依拠した資料の違いによるのか、選択基準が異なるのか不明だが、各地にそれぞれ信仰を集める地藏が祀られていたことがうかがえ、六地藏といっても、必ずしもすべてが一致しているというわけではない事実もまた興味深い点である。

このほかにも地藏リストとよべそうなものがあり、『重宝記』の作者である濱松歌国の『撰陽奇観』(巻二十四上)に「一 十二月 大坂地藏巡り初ム」(宝永五年)との記事があり、四十八箇寺が示される。本書の七つの地藏のうち、この地藏巡りに数えられるのは、龍海寺(七番)、和光寺(四十八番)の二つだけである。ということは、『重宝記』著者の濱松歌国自身、地藏巡りに数えられるのと、『重宝記』に取り上げるのでは、その意図は異なり、大坂を代表する地藏として『重宝記』の七つの地藏を選んでいるわけではないということになる⁹⁾。

ここで少し視点をずらし、同時代に出版された大坂の案内記、地藏関係の霊験記類をみることで、『重宝記』の記事を相対化してみたい。参照した作品の一覧は本稿末に掲出した。

6 龍海寺の子安地藏

龍海寺は、『撰陽奇観』(巻二十四)「大坂地藏巡り」の第七番に挙げられているものの、その記載は「五尺 ゑんめいぢぞう」となっており、本書に記された子安地藏ではない。延命地藏と同一と考えてよいのか、それぞれ別祀されていたのかはわからないが、地藏巡りとして焦点が当てられているのは子安地藏としてはなかったようだ。このほか、とくに霊験に関わる記事は見つけられなかった。

25 霊験地藏

『撰陽奇観』(巻三十五)に、「一 当夏、洛東黒谷四十二世神誉上人、大坂市中御巡行有之(道空町靈驗地蔵尊開眼なし給ひしより参詣多し)」(安永七(戊戌))との記事がみられる。『重宝記』に語られる始まりそのものであるが、こちらには祈願方法などは記されない。

27 抹香地蔵

和光寺は、『撰陽奇観』「大坂地蔵巡り」の第四十八番に数えられ、「五尺御くし八幡のさく」とある。『撰津名所図会』には「抹香地蔵」とは別に「地蔵堂」があったことが記され、『撰津名所図会大成』にも「地蔵堂(南門の東側にあり。本尊地蔵尊座像、長凡五尺許)」、「金銅地蔵(池の砌にあり)」と、寺内に複数の地蔵のあったことが知られる。『大成』の記述に従えば、地蔵巡りの四十八番とされているのは、地蔵堂に祀られた座像と思しい。参照した資料の中で、和光寺は何かの興行や他の寺院からの開帳が行われる、人々が集う場としての催事記事が散見されるが、抹香地蔵の記述は、たとえば『撰津名所図会大成』「蓮池山和光寺」の堂塔が紹介される中に「抹香地蔵(多んま堂隣る)」とある程度で、病氣平癒に効験のあることやお札に抹香を供することなどにはふれる記事は確認できていない。

28 北向地蔵

関連記事を見つけないことはできなかった。ご利益として語られる歯痛治癒は、『重宝記』中、他の神仏・霊木でも説かれており、身近で切実な問題であったことがうかがえる。

31 油掛地蔵

さきに示した本文によると、立願の際には御詠歌を三回唱え、成就の折には油をかけることを誓うとのことだが、お札参りには「地蔵堂の外にまします石仏の地蔵尊へ油を濯ぐべし」とあって、祈願する地蔵(堂内)とお札する地蔵(堂外)の二体があるようにも読める。次の資料にみられるように、この地蔵は市塵の中にあることを好まれるようなので、いまは祈願する地蔵と、「地蔵堂の外にまします石仏の地蔵尊」との同体・異体は問わず、同一の地蔵と

理解しておく。

『撰津名所図会大成』(卷十三下)に、油掛けの由来が語られている。「縁起云」として、「元和年中地中より出現し」、「諸人結縁して歩み運び、香華常に絶る事なし」という状況であったところ、

萱野何某が一子やまふに臥、医料すでに尽き、悲しみの余り此尊像に油をそそぎ繩をもて警しめ、其痛苦を助け給わらんことをせつに祈りけるに、実や菩薩の誓ひ虚しからず、病悩たちまちに平癒しければ、其人々歡喜踊躍して益々仰ぎたうとみ奉りける。其事世に広く聞え、是より願ひある人は、先繩にて巻、油をかけ其しるしあらん事を祈るにぞ、いつしか世に油掛地藏尊と称名し奉りけらし。其後、猶靈験多くましますといへども、本より現世所求皆令満足の悲願なれば、今更ためて言べくもあらず。

すでにある程度の信仰を集めていた地中出现の地藏に、萱野某が子どもの病氣平癒を祈つて油を注ぎ繩で縛るといふ荒っぽい処置を行い、その結果、祈願成就を得たことが以降の油掛けのきっかけとなったという。地藏に限らず、神仏への祈願に際して手荒らい手段をとる例は民俗事例の中に数多くあるが、こゝもその一例といえる。『難波鑑』(卷四)には、七月二十四日の「地藏祭」に関して、

取り分け、安堂寺町東堀一丁目の門の脇に、油掛けの地藏とていにしえよりあり。この地藏、よく瘡病を治し給ふとて、その宿願には、繩を掛け置き、病癒ゆる時は、必ず繩を解き参らす。寔に苦勞なる地藏の体、見るもさながら耐えがたくこそ侍れ。

と、責められる地藏の毒がる記述もみえる。

また、『重宝記』本文に、同地が安堂寺の旧地であると記されていたが、『撰陽／見聞』筆拍子』(卷八)「安堂寺の事」にも、古代の安曇寺にふれて書き留められている。

安堂寺町は安曇寺の旧地なり。日本紀に云、孝徳天皇大化五年己酉秋七月、是法師臥病於安堂寺、於是天皇而問之、とあり。今安堂寺町道具屋町すじ、東北の角なる石地藏を油掛の地藏と呼んで、諸人信をなすに靈験あり。

此地蔵、往昔安曇寺の頃より有りて、凡そ千五百年余りに及べり。願望ある輩は油を灌ぐゆへ、油掛の地蔵と称す。此類ひ余国にもあれば、因に書きつけ置きぬ。(以下、伏見下油掛町の油掛山西岸寺の地蔵のことを記す)

このように古い由緒をもつ地蔵と伝えられていた故もあって、『難波丸綱目』の「名地蔵」に数えられていたのだろう。ただし、これらの資料を見る限り、名称の由来である油掛けをいつ行うのか(祈願時か、成就お札時か)は一致しない。

この油掛地蔵の名は案内記にとどまらず、靈驗記にもみえている。『礦石集』(卷三十話)の一話。

浪華ノ邑安堂寺町一丁目筋ノ四辻ニ地蔵尊ノ石像アリ。何レノ代ヨリアリトイフコトヲシラズ。人馬ノ塵ニマミレノ狗鶏ノ屎尿ニ汚レ玉ヘリ。或ハ馬子ナド馬ノ杓ヲ掛タリ。若人病アレバ此ノ石像ニ祈リテ油ヲ濯ケルベシ。病ヲ癒シ玉ヘトイヘバ、即時ニ平復スルコト神ノ如シ。衆人ヒタスラニ油ヲ濯ケルママ、色黒ク汚レ玉ヒケリ。俗此ヲ油濯ノ地蔵ト号シ奉ル。近比(以下略)

省略した「近比」以下は次のような内容である。近所の人々がこの地蔵に堂を建てようと相談したがまとまらなかった。そこへ、地蔵が俗塵にまみれているのを嘆いた「瓦屋ノ淨信」が町の宿老に語って自宅の前栽に小堂を造って迎えたが、一般の人は自由に参ることができなくなるし、種々の災難も重なる。さらに淨信の子の夢に、地蔵が現れて元の場所に送り帰せとのお告げがあつて、元の状態へと戻された、とのことである。さらにこの後、「大坂ノ風俗七月二十四日ニハ地蔵祭ト号シテ」と、いわゆる地蔵盆の習俗の紹介と続く。右の引用箇所「何レノ代ヨリアリトイフコトヲシラズ」とある通り、古い像であることに言及しつつも、旧安曇寺との関係にはふれず、もっぱら記事の現在においても、人々から篤い信仰を集めていることに焦点があてられている。地蔵盆の話より前の部分は、『延命地藏菩薩経直談鈔』(卷三第四十六話)にも、「無尽蔵「礦石集を指す」ノ説」として引用されており、複数の作品にその名がみえる、大坂の地蔵というときには選択される著名な地蔵であったことがわかる。

さらに、『地藏菩薩応驗新記』(上末8)にも、「摂州大坂安堂寺町に、灌油地藏とて旧たる石像、路の傍におはし

けるが、靈験甚夥く、古き書典にも載て其かくれなき地藏菩薩にて在す」と紹介され、元禄六年春に、御城番の奴がこの地藏に立てかけた雨傘を失くして騒いだところ、近所の五六歳の女子が物狂いのようになり、その所在を知らせたが、それは地藏の沙汰であつたと人々が噂したとの伝承を載せ、「凡此辺に病苦災厄ある時は、此の菩薩に祈り、油を灌て供養し奉れば、必ず其効を得ると也」と結ぶ。ここでは病氣平癒にとどまらず、遺失物の発見にまで利益が広がっているが、信仰の浸透が進んでいた実態を反映しているのだろう。ここに引いた三つの靈験記は、いずれも『重宝記』よりも古く、『応驗新記』に記された「元禄六年(1693)」は『重宝記』刊行よりも百年以上の昔となる。

38 茶湯地藏

油掛地藏と同様に、茶湯地藏もまた路傍の地藏であつたようだ。

同「安国寺坂」所坂の上の角にあり。小堂に安置す。石像にして、長二尺許、所願の者茶湯を供ず。靈験いちじるし。『撰津名所図会大成』卷二

『重宝記』には、月代を嫌がる子どもに効き目のある地藏として紹介されるが、靈験はそれだけでなかつたようで、『撰陽奇観』(卷三十一、宝暦九年七月)には、

因云 此茶湯の地藏尊は靈験ありて、日毎に参詣多し。小児月代を嫌ふには、此尊前の御茶湯にて髪を濡らし、その残りたるを小児に飲すれば、忽ち髪惜みする事なし。又眼病にて患ふる人、茶湯を備え、其茶をすぐさま戴き帰り、目を洗へば平癒なす。小児乳を呑つかざるにも立願すれば叶ふといへり。

と、子どもの月代嫌いだけでなく、眼病や乳嫌いにも効能のあることが語られており、他の資料にも確認できる。

・石像にして長二尺ばかり、祈念の者茶湯を供じ、かつ茶湯を請けて煎薬に加へ、あるいは悩める所に塗れば必ず平癒すといふ。別て乳の出でざる婦人これを喫し、月代を嫌ふ小児これを濡れば、直ちにその験ありとぞ。(『浪華の賑ひ』初篇)

・農人橋筋谷町より東にお茶湯の地蔵とて立願をかけ、茶湯をそなへ線香をたく。茶をすぐにいただきかへるもあり。又眼病は御茶湯にて洗へば眼中あきらかに成。小兒乳をのみつかざるに立願叶ふ。日夜参詣多し。毎月二十四日は御縁日故、此方角に夜市あり。甚賑はしし。(『浪花のながめ』(巻二))

とくに、眼病については、『撰陽奇観』(巻三)の「三都自慢競」に、「江戸 目切ノ地蔵／京都 目やみノ地蔵／大坂 御茶湯地蔵」と、大坂代表として、江戸・京都の目にご利益のある地蔵と並べられている。

56 東向地蔵

『撰陽／見聞』筆拍子』(巻八)「新清水地蔵の事」に、『重宝記』同様、花を供して立願すれば痔が癒えることが記される。

三

諸作品中での『重宝記』の地蔵の記載状況をみたが、案内記や霊験記類を繰っていると、『重宝記』の地蔵ではないが、何度も出てくる地蔵がいる。その一例が、著名な地蔵を確認したときにふれた専修院の頬焼地蔵である。

頬焼地蔵は、永仁頃に相模国の下女の身代わりに焼鉄を受けて頬焼けとなり、その後徳治頃に京都の市原に移され、さらに寛文年間に専修院に安置されたという由緒をもつ。『地蔵菩薩応験新記』(上本八)では、その由緒を「難波芦分船、利生記等に見ゆ」と紹介した上で、さらに悪夢除け、瘡病平癒、痴漢除けなど四つの事例を挙げ、「此等の応験悉く録すること能はず。見聞の及ところ、粗近載の实事を摺撫して其梗概を記する耳」とまとめ、その信仰が過去に終わったものではなく、近時へも続いていることを述べている。ところが、大坂の地蔵の代表ともいえそうなこの頬焼地蔵は、身代わりや様々な病気平癒の霊験をいまに伝えながらも、『重宝記』には収載されていない。

ここまで、説話としての記述のあり方よりも、信仰の様相の確認に引つ張られて散漫になったところもあるが、検

討した内容をまとめると次のようになる。

『重宝記』に紹介されるのは、地蔵についてみれば、大坂の六地藏・四十八地藏に数えられるような、本格的な堂塔を構えた寺院の本尊とされるような地蔵ばかりを対象としたわけではなく、路傍や坂道の途中にあるような、人々の日常のすぐそばにある地蔵のご利益にも目が向けられていた¹⁰⁾。

それを紹介する記事として、出来事の顛末を語るという意味での説話は語られない。その結果としてのご利益だけが提示される。限られた全体分量の中で、ある程度の数の神仏を紹介するには、本書が採用しているように、「どの・どの神仏が・何に効くか・どういう方法で祈願やお礼をするか」という要点のみの掲出となるのは、むしろ自然なことであり、そこでは、まさに靈験記類が内容を詳しく記す過去・他人がどうであったかというのは後回しとなる情報といえる。『重宝記』とはあくまでも、そのときにすがりたい、自分にとって即効性のある情報が提示されていることが求められる本であった。前に「重宝記」から「図会」への名称変更にふれたが、はじめから「図会」でなかったのは、以上のことを考えると、案内記のように様々な情報がつまった本ではなく、特定のテーマ(効験)を簡潔にまとめた、便利な(重宝な)情報集という意味では、「重宝記」こそがふさわしい名称であったといえる。

『重宝記』は説話資料として扱うには情報が断片的であり、そこに補助的に案内記を参照してみても、いずれも比較的簡潔な記述であり、文章や表現の差違をうかがうことは困難で、もし差が見出されたとしても、そこから依拠資料を探ったりするような、説話文学研究で行う方法での対処は無効なようだ。しかしながら、伝承と文章表現とをたぐ・分ける関心のありか、あるいは、説話(事の顛末)が情報となり消費されるのに適した形式に変わっていく姿を探る資料としては注目してよいのではないだろうか。今回の試行では、地誌・案内記を確認した数はまだまだ少なく、靈験記の表現の分析も十分とはいえない。こうした資料を説話文学の対象として扱う方法の模索であり、また別の機会・方法を改めて考えてみたいと思う。

注

- (1) 「濱松歌国伝〔未定稿〕『浪速叢書』1、名著出版、1977年)
- (2) 『神社／仏閣』願懸重宝記』は、『重宝記資料集成』三二(臨川書店、二〇〇七年)所収「願懸重宝記」影印による。本書を含め、資料の引用にあたっては、影印・翻刻資料に基づきつつ、読解の便を考慮して漢字や送り仮名などの表記を私に改めたところがある。
- (3) 『神仏靈験記図会』は、『浪速叢書』鶏肋(名著出版、1979年)による。同書の巻末には「二篇」の予告が記載されるが、実際には刊行されなかったようである。なお、『神社／仏閣』願懸重宝記(重宝記)と『神仏靈験記図会』(図会)の相違点は次の通り。
- ・序：(重宝記)「あし敷る里の隠者識」の「叙」、(図会)「鶏鳴舍曉鐘成誌」の「序」、「叙」と「序」の内容は異なる。
 - ・目録：(重宝記)ナシ、(図会)「初篇目録」(立項69)に続けて「(神仏靈験記図会)二篇目録(近日本出)」あり(立項82、ただし、82は空欄)
 - ・52本文：(重宝記)「庚申の瘡神と唱へて」、(図会)「庚申の神忌と唱へて」
 - ・巻末：(重宝記)ナシ、(図会)「願成就日」「不成就日」「諸事に悪日」の列挙
 - ・巻末刊記の横：(重宝記)「菊屋庄左衛門」の「あられ酒」「庵羅菓酒」の宣伝文、(図会)続巻の宣伝「神仏靈験記図会願懸手引二篇」近日うりだし候 御もとの程 希ひ上候、「統いて京江戸をはじめ諸国の部を追く」出版仕候
 - ・刊記：(重宝記)「文化十三(丙子)春発行 書林(京都車屋町二条上ル町)本屋宗七(大阪心齋橋通伝馬町)塩屋長兵衛」、(図会)「文政七甲申年冬発 書屋 京(蛸薬師通高倉西へ入)山城屋左兵衛 大阪(呉服町御霊筋角)玉屋市兵衛」
- (4) 宮本袈裟雄「願掛重宝記」をめぐる『歴史公論』3巻9号、1977年)、野掘正雄『「神社／仏閣」願懸重宝記』にみる小祠と治病—現世利益のフォークロー—(日本歴史民俗論集10『民間信仰と民衆宗教』所収、吉川弘文館、1994年)、田野登「梅田牛駆け粽」考—都市生活者から見た農村行事—『日本民俗学』211号、1997年)、伊藤純「近世大坂の疱瘡対策—『神仏靈験記図会』を中心に—」(『大阪歴史博物館研究紀要』10号、2012年3月)など。
- (5) 注(4) 田野氏論文。
- (6) 注(4) 田野氏論文にも、収載対象の所在地について言及がある。
- (7) 『重宝記』の地蔵も含め、大阪の地蔵については、田野登『大阪のお地蔵さん』(北辰堂、1994年)を参照。

- (8) 宮田登『江戸のはやり神』(ちくま学芸文庫、1993年)を参照。
- (9) なお、『(大坂) 寺社順拝記』にも四十八地蔵も示されているが、いくつかの寺が入れ替わっており、和光寺は四十八番にあるものの、龍海寺は入っていない。『撰陽奇観』(1833年)までの間に人気を得たということになるうか。
- (10) 地誌類に登場する地蔵としては、大坂六地蔵に数えられる法善寺の地蔵、『難波の梅』には親子地蔵、『芦分船』には大願寺の笑地藏(こちらは『延命地藏菩薩経直談鈔』(巻十二付録十一「諸国二十四箇地藏菩薩順礼所」の二十三番にもなっている)などが挙げられる。

参照作品一覧

『撰陽奇観』、『撰津名所図会大成』、『芦分船』、『難波鑑』、『難波十二景』、『難波十観』、『浪花のながめ』、『浪花のむめ』は『浪速叢書』を、『撰津名所図会』は『日本名所風俗図会』(大阪の巻、角川書店、1980年)を、『(撰陽／見聞) 筆拍子』は『新燕石十種』八、中央公論社、1982年)を、『難波丸綱目』は『校本難波丸綱目』(中尾松泉堂書店・1977年)を、『(大坂) 寺社巡拝記』は中之島図書館蔵本を、霊験記類としては『地藏菩薩靈験記』(貞享元年・1684)、『地藏菩薩感応伝』(貞享四年・1687)、『地藏菩薩利生記』(貞享五年・1688)、『地藏菩薩利益集』(元禄四年・1691)、『礦石集』(元禄六年・1693)、『延命地藏菩薩経直談鈔』(元禄十年・1697)、『続礦石集』(享保十二年1727年)は国文学研究資料館のホームページ掲載画像を、『地藏菩薩心験新記』(宝永元年・1704)は『叢書江戸文庫 仏教説話集成(二)』(国書刊行会、1998年)を参照した。

柴田芳成(本センター准教授)

“GankakeTyohouki”: The Book of the Blessings of the Gods and Buddhas of the Edo Period

SHIBATA Yoshinari

“GankakeTyohouki” was published in 1816. It contains information about Osaka in the Edo period, especially about the blessings of the gods and buddhas. In that book, there is information about what the gods and buddhas are good for, how to pray, and how to give thanks. In this paper, I thought about how these articles were written.

There are 69 articles in total, and I focused on 7 articles on Jizo. I compared it with guidebooks, topographies, and books about miracles in Edo period. The jizo registered in the book were not necessarily famous, but they were popular and were worshiped by many people.

The style of “GankakeTyohouki” is different from books about miracles. However, this book is an important material for thinking about how stories turn into information.